

新宿や渋谷の繁華街を歩き、気になる女の子を見かけると、声をかけ、話を聞かせてもらう。そんな「夜の声かけ取材」を週末ごとに続けている。私が話を聞く少女たちは、援助交際やリストカット、オーストリアスOD（薬物過剰摂取）などといった、広い意味での「自傷行為」をくり返している子が多い。

女の子たちから話を聞くようになったのは、私が十八歳のころだ。あれから二十一年、これまでに話を聞かせてもらった少女の数は、トータルで三千人を超えるだろう。最近では、少女たちから連絡をもらって話を聞いたり、メールで相談を受けたりすることも多いが、私の活動の原点は、やはり「夜の声かけ取材」だと思っている。

私自身、十代のころは、大人や社会に対する不信感がとてもつよかった。そんな私だから、街の子たちが心を開いて自分のことを話してくれるのかもしれないし、私も彼女たちを、自分の分身のように感じている。彼女たちから話を聞くことで、私自身が救われている部分も大きい。

少女たちの声を伝えるために、自分の媒体をもちたいと思い、フリーペーパー『キミの声を伝える——VOICESマガジン』（以下、略して『VOICES』）を立ち上げたのは、二〇〇五年のことだ。私が声を聞き、カメラマンである夫のケンが写真を撮るかたちで始まった。

最近ではさらに活動が広がり、昨年設立したNPO法人「bondプロジェクト」では、少女たちの居場所づくりや自立支援等、いろんな活動に取り組んでいるが、私の原点である「声かけ取材」は、これからもずっと続けていきたいと思っている。

漂流する少女たち——。大人たちにかがいでいられない部分で、孤独に陥ったり、周囲の期待に押しつぶされそうになったり、自分というものを見失ったりしている彼女たち。自分の居場所や価値観を見つけれずに彷徨う、その姿は、かつての私自身でもある。リアルな声を聞きながら「この子たちから、学ばなくてはいけない」ということを、私はいつも感じている。

目次

〈1章〉街に立つ

歌舞伎の子——ヒカリ …… 12

「素顔？ べつに見せる必要ないっしょ」

「こちらへんに来るのは、寂しいかわいそうな人じゃん」

「生きるって面倒くせえ」

「援交してないヒカリ」と時間を重ねたい

少女を求めぬ男たち …… 25

「ここなら生きられる」と思う少女たち

「常連」キタさんが歌舞伎町にハマるまで

援交相手の家に居候しはじめたヒカリ

心の声に耳を傾けてほしくて

夜明けのSOS——アーニヤ …… 37

「優しさはいらないんです。頼ってしまうから」

「過去は消せないけど、生きていいんじゃないって」

「汚れてる自分のカラダに価値なんてないと思ってた」

「親に振りまわされる人生はもうイヤだ」

元氣じゃなくてもいいから、生きていて

「約束。また歌舞伎で会おう」

顔をもたないセックス——ミナとアオイ………56

「親のいる家に居場所はないの」

「求められるのがうれしい。必要とされてるから」

「キレイな心は戻ってくる？」

「顔を隠せば男は全員同じでしょ」

「お母さんの自慢の娘になりたいの」

くり返すつまずきと、残った希望

《伝えたい、キミの声》………78

人とのつながりを感じてほしい

出会いから広がった私の世界

家の外に居場所を探した十代

〈2章〉自分に罰を

隠れた傷あと——ユウ …… 86

「あたしのこと軽蔑しますか？」

だれにも言えなかった異様な初体験

「これが世間一般の反応かなって」

「理由を聞いてもらいたかったんだって、ママに伝えた」

自分の力で手に入れた『生きている実感』

声にならない叫び——カオリ …… 101

街で会わない『びきこもり』の子

「リスカって悪いことですか？ 他人を傷つけるよりも？」

自傷する気持ちを知りたくて

「私もなにか変わらなきゃ……」

「自分の好きなことが見えてきたから」

彼女たちの話を聞く人として

《VOICES マガジン 始動》 …… 118

声を、書いて、伝えたい

「できっこないよ」と言われながら

〈3章〉夜の彷徨

夜の街で見つけて——チサト …… 126

空白のメッセージ

「これで来月も生きられるって思えた」

「どんな結論だとしても、ママはチサトの味方」

宿った命が彼女に教えてくれたもの

家なき少女——アイ …… 139

歌舞伎の路地での再会

「いままでのことを全部忘れたくて、東京に来た」

「やりたくないけど風俗くらいしかないでしょ」

「なんで私に優しくしてくれるの？」

初めての決断——アコ …… 153

センター街の少年たちの傍らで

「父親の顔色をうかがいながら過ごしていた」

初体験は、みんなが喜んだ記憶しかない

気持ちを言葉にすることで変わった

マンバ・ギャルの卒業式——のんたん …… 165

「なりたい自分」の仮面、それがマンバ

繊細な素顔を覆い隠すように

「こんな自分もいいかも」って思えた

たった一人の出産——アイ2 …… 174

再会と妊娠

「あなたはいいけど、赤ちゃんはどうなるのよ？」

たった一人の出産

ケースワーカーの目に映ったアイ

「子育て不適合」の烙印

「もう少ししたら病院戻ります」

ふたたび街へ消えたアイ

変わらない心で寄り添うために
自己否定感と、大人社会への不信感
行政がとりこぼす母たちを支えたい
子どもを保護するだけでは解決にならない

《bondプロジェクト、@cafe MELTへ》……… 204

いつでも、つながれるように
なくした自分を取り戻せる場所
彼女たちこそ、しあわせになってもらいたい

あとがきにかえて — 支えてくれる仲間たち …… 212

* 本文に登場する少女たちは、すべて仮名です。また、地名などを一部変更しています。
本書で使用している写真は、著者の橋ジュン本人をのぞき、登場する人物とは関係ありません。

〈1章〉
街に立つ

歌舞伎の子——ヒカリ

——「素顔？　べつに見せる必要ないっしょ」

「あたしは生きてるダッチワイフだからね」

フンと鼻をならし、ヒカリがつぶやいた。その言葉からは同情もなにもいらぬという、強い意志が感じられる。でも瞳の奥には、愛情が欲しいのに得ることができない悲しみがあふれているようにも感じる。

このような瞳を私は何度見ただろう。

「居場所が欲しいんだよ」って訴えているような瞳。彼女たちのあの“瞳”を見るたび、私はかける言葉が見つからず、でもその言葉を見つけないから出会いを求めているんだと自分自身に言い聞かせ、連絡先を聞いてしまふ。

「また会いにくるね、話を聞きたいから連絡先教えてよ」と言うと、彼女たちは面倒く

さそうに「仕方ないな……」という態度で連絡先を教えてくれる。携帯アドレスを赤外線で送信してもらい、私のそれをまた送信して、その場でアドレスを交換する。

新宿歌舞伎町にあるHというビル付近の街角では、毎夜、あてどなく立っている女性の姿が見られる。私がこれまで話しかけた女性たちの年齢は十八歳から三十九歳。服装もさまざまだ。ミニスカートにサンダル姿で肌を露出している人もいれば、ジーンズにスニーカーで、手には買ひもの袋を持っている人もいる。

初めて見たときは、それぞれにだれかと待ち合わせをしているのかと思っていた。でも何度かその場所を訪れて、立っている女性やまわりをうろついている男性に話を聞くうちに、彼女たちは街角に立ち、話しかけてくる男性たちに値段を交渉し、成立したらカラダを売っているということを知ったのだ。

二十歳のヒカリもその一人。夜八時過ぎ、シャッターが下ろされたお店の前のタイル張りの床に座り込んでいた。ヒカリ一人がやっと座れる場所で、居心地よさそうに投げだされた足の前には黒い大きな肩かけカバンが無造作に置いてあった。置いているというよりは、放りだしている感じだ。

カバンの中身が気になり、お願いして見せてもらった。化粧品・香水・コンタクト・

ブラシ・ネイルチップ・アクセサリ・鍵・ヘアスプレー・携帯充電器・サングラス・コンドーム三個。今日は部屋に帰るつもりだけど、家出するならそれに加えて髪用のコテと通帳が必要らしい。

おしりが痛くなってきたのか、立ちあがってすこし伸びをしてから、また路上に座り込み、カバンの中から化粧品の入ったポーチをだして化粧を始めた。化粧をする姿をじっと見ていた私を見上げ、「見てると思ったよ。だいたい黙ったときはあたしのことを見てるよね、アハハ」と、大きな口を開けて笑う。

ヒカリは唇の赤みが気持ち悪いからと、コンシーラー(ファンデーションの一種)をリッブとして使っていた。だから唇は肌色。まぶたには二重のつけまつ毛をつけている。私とヒカリの化粧方法があまりにもちがうので、不思議になって見つめてしまった。

「化粧するのにどれくらい、時間かかるの？」

「えっ、二時間くらいじゃない？」

「これじゃ素顔がわかんないね」

「べつに見せる必要ないっしょ」

ヒカリが笑う。笑う顔を見ながら、またあの瞳だと思った。

重たい扉に閉ざされて、光の放てない瞳。笑っているのに寂しそうで、あきらめにも近い顔。まだ二十歳なのに、世の中の酸いも甘いも知りつくしたような表情を見せるヒカリは「突っ張ってなきゃ生きてらんないよ」とでも言いたげに、煙草に火をつけ息を大きく吸い込んだ。

——「いこらへんに来るのは、寂しいかわいそうな人じゃん」

ヒカリが援助交際を初めてしたのは、小学六年のときだ。池袋の街を一人で歩いていたら、父親より年上の男性に話しかけられた。

「ヒマならおじさんと遊ぼうよ。僕についてきて」

なにもすることのなかったヒカリは、男性の言葉どおりにあとをついていくと、行き先はラブホテルだった。

「まあ最初はビックリしたよね。『えっ？ なになに？？』って感じ。でも小四のときに初体験でヤッてたし、おじさんはあたしとエッチがしたくて誘ったんだなってピンときたよ。抵抗？ べつにしなかった。気持ち悪いなって思ったけど、べつにいいやつて。四万円もらって、『いいバイトになる、ラッキー』って思ったよ。寂しかったから

